

中学生から見た自分の居る場所

—— ほっとする時に焦点をあてて ——

幸田 恵子*・金丸 隆太**

(2008年6月30日受理)

“Where We Are” from the View of Junior High School Students.

Focusing on the Time They Feel at Ease.

Keiko KOUTA and Ryuta KANEMARU

キーワード: 居場所, 中学生, ほっとする, レポートリー・テスト, M-GTA

本研究では、杉本・庄司(2007)が示唆した“「居場所」の質的分類による分析”にあたるほっとするという感情面に焦点をあて探っていくことを目的として中学生を対象に自分の居る場所について研究を行った。中学生の居る場所に対するとらえ方を調査するため、G.A.Kelly.(1955)が提唱したレポートリー・テスト(日常的に居る場所を加えたコンストラクト 10×エレメント 8)を使用し、その結果を基に個人の居る場所に対するとらえ方やそれぞれの場所(エレメントで答えられた場所)に対してほっとする時(しない時)について半構造化面接を行った(対象者は中学生9名と補足データとして小学生1名と高校生2名を加えた)。得られた結果から探索的因子分析(最小二乗法プロマックス回転)を行い、場所に対するとらえ方を分析した。そして、ほっとする(またはしない)についての半構造化面接での記録を M-GTA を用いて分析した結果、ほっとする(しない)現象はグラデーションのような様相を持つことが明らかになった。また、レポートリー・テストを使用することにより、その回答を視覚的に認識することは、本人自身の場所・感覚を一番大事にしているかを再確認できる機会を生み出した。このように、本人の「科学者」である部分が前面に出るといったことがレポートリー・テストの強みであり、本人の視点で面接を進めていく上で強力なきっかけとなるだろうと考えられる。

はじめに

筆者は中学時代に、居場所がないという経験をしたことがあった。当時、筆者の友達は部活と教室で同じ人だった。その友達とのいざこざが原因で、学校に行きたくなくなった。友達という存在がとても大きかったがゆえに、友達とのいざこざが起こった時に、筆者は教室での居場所、部活での居場所をなくしたように感じた。この時に筆者の居場所は家になった。家に帰ってくると自分の居場所があると感じた。また、居場所は臨床心理学の面でも取り上げられることが多い。住田(2003)は“特に発達過程の途中にある子

*大野クリニック **茨城大学大学院教育学研究科

どもにとっては安心や安らぎを感じられるような「居場所」が不可欠である」と述べている。友人関係において「居場所のなさ」を訴える中学生に対して、畑山(2003)は居場所を見つけることが出来るような働きかけを行い、事例として報告している。加えて、高塚(2001)は“近年、わが国における自殺者が増加傾向にあるということは「居」場所を失ったと感じている人がそれだけ増えていることに他ならないだろう”と述べており、居場所という感覚は、ともすれば人の生死まで分ける重要な感覚ともなりえるだろう。

先行研究

居場所に関して

では居場所とはどのように語られてきたのだろうか。居場所に関する研究はさまざまであるが、ここでは児童期から青年期までの「居場所」研究を取り上げていく。これらの「居場所」研究の動向を大きく分けると三つの流れがある。

1つ目は「居場所」の概念を整理する研究(藤竹, 2000;住田, 2003. など)である。藤竹(2000)は居場所を社会的居場所, 人間的居場所, そして匿名的居場所の3つに分けて説明しており, 社会的居場所は“自分の存在が他人によって必要とされている場所”であり, 人間的居場所は“自分であることを取り戻すことのできる場所”であり, 匿名的居場所は“群集の一員となり今までの自分から抜け出せることからかえって自分を取り戻せる場所”と述べている。また住田(2003)は, 居場所は主観的条件と客観的条件の2つで構成されており, 主観的条件は“物理的な場所の如何にかかわらず, 子ども自身が「居場所」としての意味をその場所に付与することができるということ”としており, また客観的条件は“関係性と空間性という二つの条件がある”とした上で, さらに関係性は“子どもがそれぞれに自分の意思にしたがって自由に振る舞っても, そうした行動を他者が共感的に, 同情的に理解し, 受容し, 承認してくれているのだと子ども自身が判断し解釈できるような他者との関係”と述べ, 空間性は“実際の関係は一定の物理的空間において営まれる”と説明した上で, 特に子ども自身がその場所を「居場所」と感じる事が出来るという主観性を重視する見解を示している。

2つ目は「居場所」の実証的な研究(富永・北山, 2003. など)である。実証的な研究では小学生から大学生までの幅広い年代層を対象に行われている。また, 発達段階を考慮した研究も行われていた(杉本・庄司, 2006a;平井・小澤, 1995;宮下・石川 2005. など)。

3つ目は「居場所」作りに関する実践的な研究であった(川島, 2004;鈴木, 2003. など)。廣井(2000)は非行事例をとりあげ, 「居場所がない」という見方がどのように面接関係に効果を及ぼしたのかを検討しており, 非行少年が「居場所がない」という不安にさらされた場合に対処する方法の一つを過剰適応, つまり環境のしがみつきであることを述べている。その上で, 過剰適応も含めて全体として少年を受け入れることの重要性を示唆している。また, 橋本(2007)は適応指導教室で居場所を見つけた中学生の軌跡を辿り, 適応指導教室の居場所としての機能という観点から考察している。以上のように児童期から青年期にかけてさまざまな居場所研究が行われてきた。

G.A.Kellyと個人的構成概念理論(Personal Construct Theory)について

次に, レポートリー・テストの基の考えとなった個人的構成概念理論(PCT)について先行研究を交えて説明していく。若林(1992)はG.A.Kellyのパーソナリティ理論の鍵となる概念は, 「構成概念」と述べており, “ここでいう構成概念とは, 外界を認知し, 解釈する枠組みであり, 個人が事象を分類し, 行動の

過程を組み立てるために使用する概念である”と述べている。つまり、構成概念は“現実を眺める透明なパターンあるいは眼鏡のようなもの”(堀毛, 2005)”であり、個人は世界を独自のフィルター(つまり構成概念)を通して認知しているのであると考えたのであった。この個人的構成概念理論(PCT)を基に作られたのがレパトリー・テストであった。本来のレパトリー・テストは役割構成レパトリー・テスト(Role Construct Repertory Test)とよばれるものであった。

レパトリー・テストを用いた先行研究を概観してみると以下のようなものがあげられる。澤田・長瀬他(1990)は中学生の友人概念に関する研究でレパトリー・テストを使用し、子どもたちが友人をどのような特徴を持つ者として認知しているかといった、意識あるいは概念レベルでの検討を行い、青年期前期の子どもたちが友人をどのような人物としてみているか、その際、どのような概念枠を用いて友人をとらえているかを明らかにした。また、澤田・八木・藤田(1990)ではパーソナル・コンストラクトの発達的变化を見るために中学1年生から3年生にかけての追跡的調査を行っている。長江(2005)は大学生のシャイネスに対する構成主義的認知療法の効果研究の中で社会不安を対象にレパトリー・テストの尺度化を試みている。また、米田・金丸(2007)は青年期の人々を対象にレパトリー・テストを使用し、自立の概念を探り、自立のモデルを提唱している。

レパトリー・テストは“被験者が自分でどのような構成概念次元を使うことも自由であるという点では構造化されていない。この点は重要である(若林, 1992)”といわれている。つまり、対象者がどのような認知をもって世界を捉えているかということを研究者は制限できないということである。しかし、レパトリー・テストの実施という側面から見るといくつか短所がある。若林(1992)が示したレパトリー・テストの問題点は以下の3点である。簡単に要約したものを載せる。

①被験者が使用する構成概念に表面的な構成概念(たとえば「男一女」など)が多い場合である。しかしこの場合、表面的な構成概念を安易に削ることは単純には賛成できない。

②文化的な違いによる問題点(例えば人物を重複なく挙げるという点で、日本人では欧米よりも交友範囲が狭いことも指摘されている)

③Rep.テスト自体が被験者にかなりの知的水準を要求するという点

また藤原(1973)はレパトリー・テストについて使用してはいけない構成概念を以下のように述べている。

①役割人物を記述するために使用してはいけない構成概念(成功—不成功, 好き—嫌い)

②場面的構成概念(同じ学校の出身者, 同県人)

③過度に特定の人にしか当てはまらない構成概念(職業名)

④過度に誰にでも当てはまる構成概念(男一女)

⑤表面的構成概念(背が高い—低い)

⑥あいまい・意味不明な構成概念, 他の人に通じにくい理解困難な構成概念(黒—白)

以上が藤原(1973)の指摘した点であるが、若林(1992)は“こうした条件が Kelly が本来考えていた Rep. テストの自由で随意的な性質を損なうのではないか”と危惧している。なぜなら、このような表面的な構成概念で世界を認識している個人がいけないとは言えない現状もあるからである(つまり表面的な構成概念で世界を認識している人はいるということである)。

思春期に関して

本研究で中学生という時期を調査の対象に据えたのは、筆者自身が中学生の時に居場所がないと感じたからという理由はあるが、発達段階の観点から、思春期は疾風怒涛の時代といわれる時期であり、不安定になりやすいと考えられているからである。

まず思春期は第二次性徴という身体的な変化が顕著に現れる時期である。この点から最上(2005)は思春期の女子において“女の子の場合は男の子のような性の衝動というより、自分の体の変化を気にするようになり、他人がどう見るかということに非常に気にし、悩む傾向が見られる”と述べた。身体的な変化には個人差があるため(周りに気づかれてしまうのではないかと感じることも多いだろう)、周りの子と自分は何か違うのではないかと思ひ悩む生徒も少なくないだろう。また、女子に限らず、男子にも身体的な変化が起こり、いわゆる多感な時期にさしかかる。岸(1999)は“男性の場合には、突然に偶発的に(意図的な場合もあるが)マスターベーションによる射精を経験することになる。つまりは「善」であった自分に「悪」が入り込んでくるのである。そして、この具体的体験は、これまでの自己イメージだけでは、自分自身を支えられないことをその時期の子どもたちに漠然と気づかせることになる”と述べている。

身体が不安定な時期には少なからず、精神的にも不安定になる可能性は大きい。“思春期や青年期は、第二次性徴や社会の価値観との葛藤など、身体と精神がそれまでのバランスを失い不安や動揺を感じやすい時期である(越川, 2005)”といわれ、児童期までの価値観が揺らぎ始め、新しい価値観が身につけ始める段階でもある。林(2007)は“思春期には養育者からの心理的な自立が始まることも多い。それは、子どもの認知的な発達により、ちょうどこの頃、抽象的な思考が可能になり、社会や世界といった広い視野に立ち、自分の存在を外の視点でみて、今まで受け入れてきた価値観を相対化することが出来る時期に達することが多いからである”と述べている。つまり子どもから大人への階段を登り始めた段階であり、今まで自分が持っていた価値観と外側からの価値観を試行錯誤しながら、融合させ始めるのである。

衣斐(2005)は思春期の発達過程を述べる中で“自立への憧れと同時に不安や恐れが増大する。孤独であることや他者との違いにことさら過敏になり、自分とは何かを模索する。不安定やアンバランスになりやすく、挫折や危機を経験し、時に問題を顕在化させる。仲間集団になじめず内向きに入りすぎると、孤立しこもりがちになる。臨床的には不登校や引きこもり等として顕在化する。逆に、家族から離れ外向きに行きすぎると、仲間に合わせすぎて自分を見失ったり社会のルールを逸脱する。臨床上では、非行等の反社会的問題になる”と述べている。また、内的な葛藤を抱えている者同士の交流を強く求めるのもこの時期であると思われる。しかしながら、その相手である同世代の者も、自分と同じような状況にある(個人差はあるが、葛藤状態を抱えているといえるだろう)。上手く自分の葛藤状況を共有できる他者(大体が友人であるが)の存在はとても大きいだろう。しかしながら、他者と葛藤状態を共有するまでが難しいのではないだろうか。現在では「人間関係の希薄化」がいわれて久しい(速水, 2006)。“希薄化とは、互いに傷つかないように深入りしないことを結束とし、相手に気をつかったり表面的な同調を共有したり、あるいは逆に親密な関係になることを回避しようとするという傾向である(藤井, 2000)”。このように共有できる他者が居ない場合(あるいは作るのが難しい人など)では、極端な考え方をしてしまい(なおかつそれが普通だと本人は疑わない)、そのまま1人で抱え込んでしまう者も少なからず、存在していることであろう。思春期や青年期は他の年代に比べ、子どもから大人への過渡期となるため、より身体的にも精神的にも不安定になりやすいといえるのではないだろうか。このような不安定な時期だからこそ、居場所という安心して身をゆだねることが出来るということが必要なのではないだろうか。

研究

これまでの居場所研究では実証的な研究は多くなされてきたが、居場所の質的な研究についてはまだ数えるほどしかなされていない。居場所について質的な研究を行っているのは小畑・伊藤(2003)の研究である。この研究は自由記述による構成概念の抽出を行っていた。さまざまな居場所研究がなされる中で、1990年代からの居場所研究を概観した杉本・庄司(2007)は、これからの居場所研究の課題を以下の4点にまとめて提示した。

- ①「居場所」の質的分類による分析
- ②人を取り巻く複数の「居場所」の総合的な分析
- ③「居場所」を選択する要因の分析
- ④メンタルヘルスとの関係

加えて杉本・庄司(2007)は居場所を構成する感情要因については“どの研究においても抽出されている要素が「精神的安定」であり、「居場所」における安心感をはじめとして、精神的に安定している状態を表すものといえる”と述べており、また、則定(2006)は多くの先行研究において、“場所、人、行為、感情、時間といった要素が重要視されてきたという点では、多くの先行研究において一致しているように思われる”とした上で“しかし、未だ居場所の定義が明確でないため、この点に関しては、詳細な研究を行う必要がある”と、示唆していた。則定(2006)は「心の居場所がある」または「心の居場所がない」という感覚に焦点をあて、「居場所がある」場合の場所、時、気持ちについて(ない場合も同様に)調査をしている。その中で、居場所の意味づけに関しては、「安心」、「ほっとする」といった感情面を重視する回答が目立ったことを指摘している。

以上を踏まえ、本研究では杉本・庄司(2007)が示した①「居場所」の質的分類による分析の部分である、その中でもほっとするということがどういうことなのかに焦点をあてて探っていくことを目的とする。つまり居場所(というと物理的か心理的かといった議論になるだろうがここでは、どちらの意味も含んだ形で使用している)の中でもほっとするという感情面に限定したところ(居場所の構成概念の中の一部である)を具体的に探っていき、その現象を明らかにしていくことである。そうした上で、ほっとする居場所の具体的な現象を明らかにし、居場所のなさを感じている人に対する援助に微力ながら貢献することを目的とする。加えて、レパトリー・テストがさらに臨床的な面接場面などに活用させるため、レパトリー・テストの使用の可能性と問題点を見出すことを目的とする。

分析結果

因子分析による探索的分析

レパトリー・テストから得られた結果を元に、対象者9名(対象者B～L)のそれぞれのコンストラクトの特徴を掴むため、探索的因子分析を行った(重み付けのない最小二乗法、プロマックス回転)。しかしながら、対象者D、E、G、Jについては結果が出たが、1因子構造であり、結果が出なかった場合は規則性なしという結果だった。以下に例として対象者Bの探索的因子分析結果を提示する(表1)。

Table1.対象者 B のコンストラクトの因子分析

Table1.対象者 B のコンストラクトの因子分析結果・3 因子(重み付けのない最小二乗法・プロマックス回転)				
		I	II	III
つままないーおちつく	第 I 因子:「つまらない」	.978	.176	-.504
する事が無いーガヤガヤしてる		.971	.038	.072
つままないー楽しい		.962	.003	.041
なんもする事が無いー友達がいっぱいいる		.944	.085	-.103
楽しくないーうるさい		.936	-.079	.157
楽しくないー明るい		.762	-.153	.389
遠いー近い		-.465	.389	-.177
人が多いー元気	第 II 因子:「未知」	.144	.995	.293
なんも売ってないーいろんな物が売ってる		.074	-.923	-.064
最近行かないー毎日いる	第 III 因子:「行く頻度」	-.016	.257	.851
因子間相関		I	II	III
		I	1.000	.05
		II		1.000
		III		

対象者 B の因子分析結果において、3 因子構造が得られた(表 1.)。第 1 因子には「つままない」「する事が無い」「つままない」「なんもする事が無い」「楽しくない」「近い」といった項目が含まれていた。対象者 B の面接記録からは「家はつまらない」「一人になると何もすることがなくてつまらない」「家本当につままない、楽しくない」「一人だから。みんな何かしらしてるから、なんも面白いことがないから～つままない」といった内容が語られた。したがって、第 1 因子を「つまらない」と命名した。第 2 因子には「人が多い」「いろんな物が売ってる」といった項目が含まれていた。対象者 B の面接記録からは「駅前人が多い」「多いとなんか・・・嫌だ」「友達とかだったらいいんだけど、なんか変な人とかいっぱいいるから～」「お店非常に売ってる」といった内容が語られた。したがって第 2 因子を「未知」と命名した。第 3 因子には「最近行かない」といった項目が含まれていた。対象者 B からの面接記録からは「お店とか友達の家よりは行かない」「友達の家と Y 小は毎日居る」といった内容が語られた。したがって第 3 因子を「行く頻度」と命名した。

コンストラクトを概観してみると、対象者 B にとって居る場所に対する捉え方は、つまらないか楽しいかということが重要であるようだ。第 1 因子である「つまらない」はほぼ、家に対するコンストラクトである。極端に家という場所に居たくないことがここから窺われる。家は常につまらないので、家の他に行く場所(エレメントにある場所)を自分から作っていくことを楽しそうに話していた。そして、「友達がいっぱい居れば居るほど自分の居場所見つかる」と語ったことから、その場で友達を増やしていくことによって、自分が居ていいと思える場所を増やしているように思える。自分がほしいもの(楽しさ)を自分から求めて行動し

ている点で対象者 B の健康さが窺える。人という楽しさを常に求めているということからも、根底には 1 人になりたくない寂しさを抱えているのかもしれない。また、対象者 B は「家」のエレメントを最後に記入したことから、家という場所には必要最低限しか残らないのではないかを考えられる。または、そこまで重要視していないとも考えられるだろう。

対象者 B のように、他の対象者についても探索的因子分析を行うことでレパートリー・テストから得られた場所の特徴を掴むことが可能となった。

質的分析(M-GTA 法を用いて)

レパートリー・テストを使用した半構造化面接での記録を基に、中学生 9 名(対象者 A~F, H~J)にとってほっとするとはどういうことかについて質的に分析を行った。データ分析は木下(2007)によって開発された修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(以下、修正版 M-GTA とする)を用いて行った。本研究において修正版 M-GTA を質的分析の方法として採用した理由は①従来 GTA が限定的な研究領域の限定的な研究テーマの研究に適していること、②データの切片化をせずに、現象の大きな流れやデータの統合性を重視すること、③分析ワークシートとよばれる書式を使用することによって、わかりやすく体系化されていることである。

続いて M-GTA の結果と考察について述べる。結果を説明する際、筆者の解釈や考察の内容も自動的に含まれるため、一緒に記載していくことにする。結果の書き方については、概念は□、小カテゴリーは〈〉、中カテゴリーを《》、大カテゴリーを【】で表すことにする。また対象者の言葉は「」で、そして中略は〈…〉で表すことにする。中学生にとってほっとするというプロセスは【ほっとしなさ】から【変化自在の通り道】を経て【ゆるぎない安定感】に辿りつくプロセスであった。【ほっとしなさ】は《外界からの影響大》と《人と関わる時の居心地の悪さ》との相互作用からなり、続いて【変化自在の通り道】であるグラデーション部分に突入し、〈人とのつながりを確認〉、〈嫌な子がいなくなり、気まずい雰囲気からの解放〉、家という空間に落ち着くを経て【ゆるぎない安定感】につながっていく。【ゆるぎない安定感】は〈適度な距離感のある安定した関係〉と〈人と楽しく過ごす時間・空間〉の 2 カテゴリーからなる、人との関わりを重視した層である《人と居るときの居心地の良さ》と、〈周りに人が居ても 1 人になれる〉、〈1 人に集中〉、〈ほっとしてる感覚〉の 3 カテゴリーからなる 1 人の時間を重視した層である《自分の世界》の合計 2 層から成り立っている。また、逆に【ゆるぎない安定感】から【変化自在の通り道】を経て【ほっとしなさ】に帰ってくるプロセスでもあることが明らかになった。【ゆるぎない安定感】から【変化自在の通り道】である〈グループ間の緊張状態〉を経て、【ほっとしなさ】へたどり着く。このプロセスにおいて注目したい点は【変化自在の通り道】である。【変化自在の通り道】はほっとするとほっとしない状態のいわば中間地点に位置するプロセスである(図 1 参照)。

ここからは、注目したい【変化自在の通り道】について詳しく述べる。【変化自在の通り道】での中心的なカテゴリーは家という空間に落ち着くという概念である。この概念は、物理的にも感情的にも一旦リセットするという流れがある。ここでの対象者は「家っていう空間に…落ち着く」と語り、また他の対象者は「こう家に帰ってきたときですかね～なんか学校のことが終わって、家に帰ったとき」と語っている。本研究においては反対の流れ(家から学校に行くときの感情状態)は見出されなかったが、出てきたヴァリエーションを解釈していく際に、この反対の流れも存在している可能性があるのではないだろうかと推測された。家から出て行くときに気を引き締めて出発することは、日常的に私たちが行っているのではないだろうか。そういった意味で、外界(外の世界)から安全基地(家という空間)への移行は重要なカテゴリーであると解

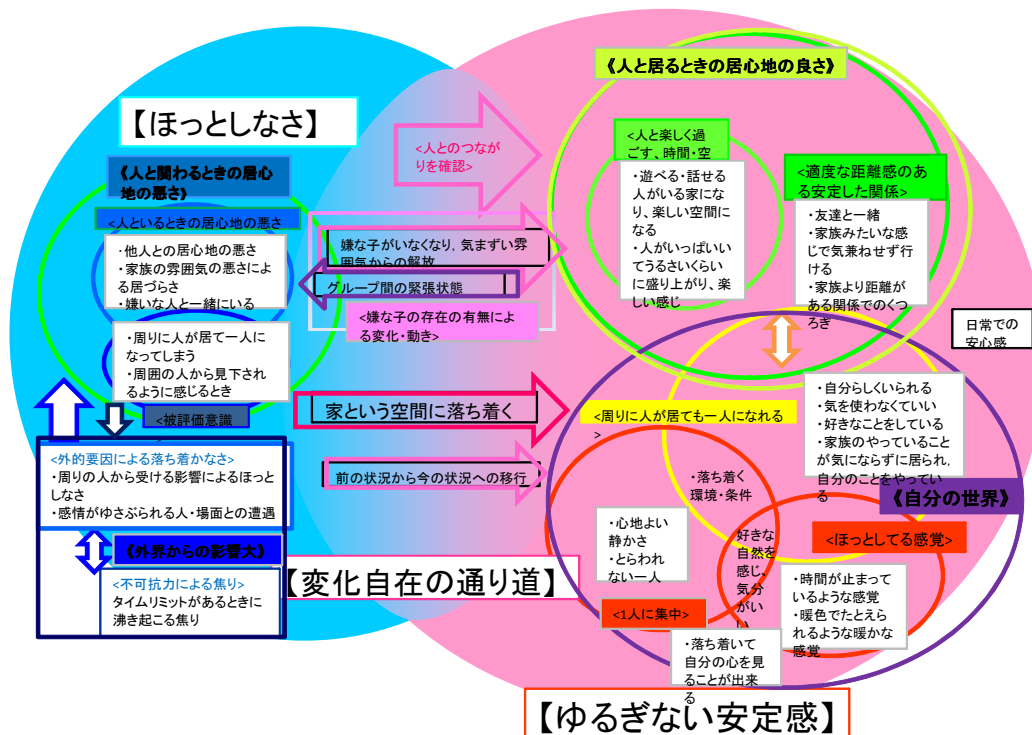


図1. 中学生にとってほっとするとは？

積した。

小カテゴリーでは人とつながりを確認」と「嫌な子の存在の有無による変化・動き」の2つがある。この2つの小カテゴリーは人と関わるときに起こる感情の動きである。1つ目の「人とつながりを確認」は「母親の存在を確認できたときの安心感・安堵感」と「相手の反応・行動で不安感が軽減」の2概念が見出された。対象者は「今女3人で同じ部屋で布団になって寝てるんだけど、そのときにこう横向いて～横向いた時にちゃんとお母さんが居るとき～<…>子どもだけけど、やっぱりそういう時はほっとする。ケンカしてないときは～<…>あ～よかった～って」と語り、「ちょっとぎくしゃくした関係がちょっと…でも感じる相手であれば…やっぱり…普通に返してくれたらほっとする」と語っていた。これらの根底にあるものは不安(母親の場合はある種の見捨てられ不安、友達の場合は以前にシカトされたという体験があったので、今回もシカトされるのではないかという予期不安)であり、このような不安状態を持ちながらも相手にアプローチし(存在の確認であったり、話しかけるという行為)、その結果である存在や相手の行動(そこに居ることや普通に返事をしてくれるということ)によって不安状態の高かったものが低下し、安心(安堵)し、さらに人とつながりを確認できるという流れがあると解釈された。

2つ目の小カテゴリーである「嫌な子の存在の有無による変化・動き」では「嫌な子がいなくなり、気まずい雰囲気からの解放」と「グループ間の緊張状態」の2概念が見出された。「嫌な子がいなくなり、気まずい雰囲気からの解放」で対象者は「嫌な子がいたら～…逃げたり～そのまま一緒に遊んでる友達の家に逃げたり、あっちも逃げるときがあるから、あっちが逃げたときにはほっとするみたいなく…その子がなくなるから」と語り、嫌な子が居るときには落ち着かない状況であることも推測された。嫌な雰囲気が解消したときによりやく気が休まると解釈した。「グループ間の緊張状態」で対象者は「本当に嫌いな子が居るときが

あるから～なんか、安心できなくなって～、その子の悪口…その子の～そっちのうちのグループの悪口<…>その子のグループの悪口を言うから～すごい言い合いになったりしちゃうときもあって、そういう時に落ち着かないかな、だからそういう時に…そういう仲悪いときはほっとしないっていうのがある」と語り、人との関わりあいの中で波風が立つような雰囲気グループ内に流れているときであって、その波風が立つような雰囲気というものが人によって生み出されていると解釈できる(特にこの場合では仲の悪い友達)。そして、この二つの概念は双方向に動くと解釈した。つまり、人との関係性によって移動する概念であると位置づけた。

また「**前の状況(一種の緊張)から今の状況への移行**」では、対象者は「宿題とかがあって宿題が終わると～ほっとする」と語ったり、また他の対象者は「難しい技が出来たときとか<…>は～できてよかった～って<…>なんか怪我しそうで怖いとか、そういうのがあるから、は～よかった～って」と語ったことから目標達成による不安な状態からの解消と解釈した。この移行は「**タイムリミットがある時に沸き起こる焦り**」から発生し(ある対象者は「なんか…なんか…提出してないものがあると…なんかやべやんなきゃみたい」と語っている)、宿題という提出期限がある状態から、その宿題が終わる段階までの移行作業「**前の状況(一種の緊張)から今の状況への移行**」を歩むことによって、終わりに達した瞬間に今まで張り詰めていたものが解けると解釈した。ここでは外的な要因が主に本人の感情状態に影響を与えている。外的な要因には終わりがあるため、この状態は一時的なものであるだろう(程度の差はあるだろう)。

これらの移行の状態とは少し異質なものも明らかになった。それは「**興奮が冷め、冷静になる**」という概念である。この概念で対象者は「こう、なんかマージャンで自分の考えが上手くいくとわ～って興奮するけど、こうそのあと、なんか冷静になってきてるときってほっとしてると思います」と語っており、これはある意味ポジティブな状態からのクールダウンであり、プラスの状態が下がり、落ち着いてくる状態を表していると考えられる。本研究では1概念のみでカテゴリーに含められなかったが、このプラスからのクールダウンの方向性は他にもあると考えられる。このように【変化自在の通り道は】グラデーションのように、双方向に行き来していると解釈した。

今回の結果を概観してみると、【ゆるぎない安定感】と【ほっとしなさ】の境目は明確に決められるものではなく、結果図のような曖昧なグラデーションのような状態であった。中間地点である【変化自在の通り道】を細かく見ていくと、【ゆるぎない安定感】と【ほっとしなさ】の双方にまたがり、なおかつ人と関わる領域と外的な要因の有無における領域によって構成されていることが明らかになった。今回の質的研究で明らかになった結果図には、これから追加されるべき概念が存在すると思われる。また、今回の結果図(○を二つ組み合わせたもの)は最終的にはメウスの輪のように循環すると考えられる。つまり、【ほっとしなさ】から【変化自在の通り道】を経て【ゆるぎない安定感】にたどり着き、もう一方の【変化自在の通り道】を経て【ほっとしなさ】に戻るという循環である。今回では、【変化自在の通り道】の移行先は【ほっとしなさ】から【ゆるぎない安定感】である場合が多かったが、この逆の通り道も存在していると推測できるからである。この反対の流れは今回の結果では「**グループ間の緊張感**」の流れだけであったが、【変化自在の通り道】には更なるヴァリエーションがあると考えられるからである。そのヴァリエーションについて仮説を立てる。1つ目の仮説は【変化自在の通り道】の中にある家という「**空間に落ち着く**」では【ゆるぎない安定感】から【ほっとしなさ】への移行も存在するということである。つまり、学校に行くという状態の時には、家に帰ってくるという安心感よりは、外界へ出て行く時の気持ちの引き締めというプロセスが存在するだろうと予想できる。2つ目の仮説は【変化自在の通り道】の中にある<人とのつながりを確認>の場合では、仲の良かった友達

にある日突然シカトされ、友達とのつながりを確認できないという逆の流れも中学生の日常にはありふれていると考えられるからである。つまり、昨日まで【ゆるぎない安定感】の中にある《人と居る時の居心地の良さ》であったが、今日はなぜか【ほっとしなさ】である《人と関わるときの居心地の悪さ》に移行する道を辿ってしまうということである。3 つ目の仮説は【変化自在の通過道】の中にある「前の状況(一種の緊張)から今の状況への移行」の場合には、テニスのラリーの順番を待っている時には緊張しないが、ラリーが始まると、こっちに打たなければというような緊張を伴うという流れも存在するだろう。このような仮説からメビウスの輪のようなモデル図が完成すると予想される。ほっとするという現象はメビウスの輪のように、表【ゆるぎない安定感】の部分かと思えば、ねじれ【変化の通過道】、裏【ほっとしなさ】に変わり、と思えば【変化自在の通過道(逆バージョン)】をくぐり、表【ゆるぎない安定感】にたどり着くように循環していると考えられる。このような常に揺らいでいるものであり、【ゆるぎない安定感】に定住はできないことも多くあると思われる。

臨症的な観点から考察を試みれば、このようなほっとする現象はメビウスの輪のようであるということを中心に留めて、クライアントと話すことには意義があると思われる。例えば、中学校のスクールカウンセリング場面において、思春期における「居場所のなさ」を主訴に来談する生徒がいたとした場合、「ほっとする居場所」を見つけ、一見問題は解決したように思われる。カウンセラーも、一安心することがあるだろう。しかしながら、また同一人物が同じ問題で相談室に舞い戻ってくることも事実としてある。そうした時にカウンセラー側がほっとするという居場所が常に揺らぎ、移ろいやすいという現象であるとの心構えがあれば、このような事態が起こることを想定の範囲内として取り扱うことができるのではないだろうか。つまり、クライアントがメビウスの輪の中にいるようなイメージを持って面接に望むことがカウンセラーには有効であると思われる。その輪から抜けることが問題解決というよりは、輪の中で移動し続けることがまさに思春期の一側面なのだろう。

事例分析(対象者 A の 5 回の語りを通して)

対象者 A(中 3, 女性)とは 2 ヶ月に 1 回のペースでレポーター・テストを媒介に面接を行った。そして、毎回の面接の最後に対象者 A にとっての居場所について語ってもらった。ここでは 5 回の面接で共通して聞くことが出来た居場所についての語りを中心にまとめる。

第 1 回目;「周りに気を使う」

居やすい場所と居づらい場所を中心に語る。特に居づらい場所は嫌いな人が近くに居る時であり、その友達の影響で自分の感情が不安定になるという内容であった。場所によって自分が変わるということも述べており、周囲の人の目を気にしてしまい、なかなか自分の好きなようにふるまえない対象者 A のもどかしさを面接中に感じた。

第 2 回目;「友達の存在の大きさ」

理想の居場所と現実の居場所を中心に語る。理想の居場所では自分の思ったこと何でも言えるような環境で自分が嫌いな人が誰も居ないという内容であった。加えて何でもいえるような友達が居ればいいということに話しながら行き着くのであった。一方現実の居場所では自分が何を話せば相手が満足するかということに気にしながら生活している現状が垣間見えた。友達という存在が大きいゆえに、自分をなかなか表現することが難しい様子であった。

第 3 回目;「自分ってなんだろう」

現在の居場所は狭いということ語る。学校での居場所については狭い、なぜなら嫌いな人がたくさん

いるからである。一方で家の自分のスペースに愛着が湧いてきたと話していくが、最後になって「でもやっぱり違うのかも」と述べ、対象者 A の居場所が揺らいでいる印象を受けた。

第 4 回目;「人に頼らない」

前より良くなったと語る。人に頼らなくなったからと述べ、必然的に人に頼ることができなくなった出来事があり、それを機に対象者 A は自分のすべきことをやろうと考えたのだった。4 回目の時期は受験を控えており、そのことが対象者 A の思考に影響を与えたことが窺えた。

第 5 回目;「居場所」

居場所は人との関係だと思つと語る。人との関係によって作られるため、人との関係が悪くなれば居場所は悪くなり、人との関係が良くなれば良くなると感じている。そういう居場所が全てなくなったら 1 人で自分の居場所を作って、さまざまなことを考えたりしてから友達との居場所に戻っていくと語る。だから 1 人の居場所も友達と一緒に居る居場所もどっちも必要である。

考察;対象者 A にとっての居場所とは他者との関わりの中において居場所を見出すことであった。しかしながら、現実の居場所は自分の理想の居場所とは異なるものであった。対象者 A にとって納得がいく居場所を見つけるためには 1 人の世界を持って内省することで、自分がこれでいいのかと捉え直し、再確認する時間(すなわち 1 人の居場所)が必要であったことが分かる。藤竹(2000)は居場所を 3 つの居場所に分けて捉えているが、ここでいう他者との関わりの中での居場所は“社会的居場所”であり、自分を捉えなおす時間という一人の居場所は“人間的居場所”に相当するものであるだろう。対象者 A にとっては友達と関わる“社会的居場所”は今の自分の居場所ではなかったと思われる。その現実にもがき、自分一人の“人間的居場所”を持つことによって、自分を捉えなおし、その上で、自分を見直し、考え方を変えることによって“社会的居場所”を自分の居場所として獲得していく準備を整えていったのではないだろうか。藤竹(2000)は“空間を自分にとって満足のできる場所として人間が意味を見出した時にそこは人間にとって居場所となる”と述べており、そして、集団の中での自分の居場所、個人としての自分の居場所はどちらがいいというわけではなく、どちらも大切であり、対象者 A にとっては今社会的な居場所の獲得が重要な課題であったことが考えられる。

総合考察

レポートリー・テストでの結果を概観し、性差の観点から考えてみると、男子は物理的視点、目的視点で居る場所をとらえており、女子は周りとの関係を重視して居る場所をとらえている傾向があるということが分かった。そして、このような性差はあるにしても、居る場所に対するとらえ方は人それぞれ、異なるということが明らかになった。藤竹(2000)は、さまざまな居場所について語っているが、“人間的居場所は社会性の弱い居場所であるけれども、私的空間を形成し、社会的居場所で感じる緊張を解放する場所として、人間にとって不可欠の場所である”と述べており、ここでいう人間的居場所は“我が家に帰ってくるとほっとする”場所や、“仕事の疲れを癒すことができ、ほっとひと息つける場所”のことであるとしている。このように、ほっとできる居場所というものは、人間にとって必要なものであるだろう。そして、発達段階において、“激しい変化を伴う思春期(越川, 2005)”には、自己のゆらぎを抱えながらも、自己の価値観や新しい社会との価値観に左右されながら奔走し、心理的自立を始めていかなければならない時期であり、ほっとする居場所は思春期の彼らにとっても必要なことであると考えられる。本研究では、中学生が居る場所の中でも

ほっとするという感情面に焦点を当てて、ほっとするとはどのようなことかについて質的な研究を行ってきた。最終的に、ほっとする(またはしない)はグラデーションのような現象であることが推察された。そして、仮説を合わせて考えた場合、メビウスの輪のイメージを編み出した。ほっとするとほっとしないという現象は【変化自在の通り道】というメビウスの輪でいうねじれの部分が存在しており、ほっとするとほっとしないは二元論では語れないことが示唆された。つまり、ほっとするほっとしないとは、常に一定ではなく、揺らぎやすく、移ろいやすいということである。メビウスの輪のように、【ほっとしなさ】であったかと思えば、【変化自在の通り道】を通っており、いつのまにか【ゆるぎない安定感】の領域に足を踏み入れているということが起こっている可能性があるということだ。この仮説を現実の臨床場面でどう生かすかについて考察した。例えば中学校のスクールカウンセリング場面において、居場所のなさについての問題が一見解決したかに見えるということもあるが、本当の意味での解決とは言えないことも多い。そういった時に、カウンセラー側がほっとするという居場所が常に揺らぎ、移ろいやすいという現象であるとの心構えがあれば、このような事態が起こることを想定範囲内として取り扱うことが出来るのではないだろうか。つまり、クライアントがメビウスの輪の中にあるようなイメージを持って面接に臨むことがカウンセラーには有効であると思われる。その輪から抜けることが問題解決というよりは、輪の中で移動し続けることがまさに思春期の側面なのだろう。そして、事例では5回の面接を通して、対象者が居場所を語ることで居場所が出来上がっていく過程を追うことが出来たのではないかと思われる。

本研究では、対象者にとっての居場所は言うまでもないが、「対象者自身の居場所」であって、時としてカウンセラーはその居場所の提案を優先しがちであるが、居場所感を聞き続けることにより、対象者の中で、形にならなかったものが、対象者自身が居場所について語ることを通し、徐々に形作られていくこともあるということが示唆された。レパトリー・テストを使用することにより、その回答を視覚的に認識することは、本人がどの場所・感覚を大事にしているかを再確認できると考えられる。このように、本人の「科学者」である部分が前面に出ること、それがレパトリー・テストの強みであり、本人の視点で面接を進めていく上で強力なきっかけになるだろうと思われる。

引用文献

- FayFransella,RichardBell and DonBannister. 2004. A Manual for Repertory Grid Technique SECOND EDITION John Wiley & Sons,Ltd
- 藤竹暁. 2000.「居場所を考える」『現代のエスプリ別冊生活文化シリーズ3・現代人の居場所』. 47-57
- 藤原哲. 1973.「ジョージ・ケリ研究-1-哲学的立場-1-」『埼玉大学紀要教育学部(教育科学)』22, 1-8.
- 橋本有紀. 2007.「適応指導教室で居場所を見つけた中学生不登校女子の一事例」『駒澤大学心理臨床研究』. 6, 13-18.
- 畑山愛. 2003.「孤立をくりかえす女子中学生の事例:居場所を見つけるまでのかかわり」『御茶ノ水女子大学発達臨床心理学紀要』. 5, 47-58.
- 速水敏彦. 2006.『他人を見下す若者たち』. 講談社現代新書.
- 林もも子. 2007.「愛着と養育のライフサイクルー思春期の子どもの自立と養育者. 養育者のアタッチメントの視点からー」『こころの科学134[特別企画] 子育てとこころ 養育と愛着』. 92-97.
- 平井なか・小澤紀美子. 1995.「質問紙調査法による中・高校生の求める空間条件—中・高校生の居場所

- に関する研究. その1—『日本建築学会大会学術講演梗概集』. 79-80.
- 廣井いづみ. 2000. 「居場所」という視点からの非行事例理解『心理学研究』. 18(2), 129-138.
- 衣斐哲臣. 2005. 「仲間と自分—思春期の社会化と個性化」『臨床心理学』. 5(3). 金剛出版. 329-334.
- 伊藤美奈子編. 2007. 「朝倉心理学講座」海保博之監修『思春期・青年期臨床心理学』. 朝倉書店
- 川島美保. 2004. 「慢性疾患とともに生きていく思春期の子どもの仮の居場所づくり」『高知大学学術研究報告 医学, 看護学編』. 53, 29-40.
- 木下康仁. 2007. 『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践』. 弘文堂
- 岸良範. 1999. 「コンビニ・ポケベル・テレクラ, 援助交際にみる心のゆらぎ」『児童心理2月臨時増刊710』. 金子書房. 31-40.
- 宮下敏恵・石川もよ子. 2005. 「小学校・中学校における心の居場所に関する研究」『上越教育大学研究紀要』. 24(2), 783-800.
- 最上貴子. 2005. 「二次性徴と戸惑い—身体からのアプローチ」『臨床心理学』. 5(3). 318-323.
- 長江信和. 2005. 「大学生のシャイネスに対する構成主義的な認知療法の効果とその要因3 行動科学・臨床心理学研究領域, I. 課程博士論文, 修士論文要旨」『人間科学研究』. 18 補遺号, 109-110.
- 則定百合子. 2006. 「思春期における「こころの居場所」に関する研究.」『神戸大学発達科学部研究紀要』. 13(2), 17-27.
- 小畑豊美・伊藤義美. 2003. 「中学生の心の居場所の研究—感情と行動及び意味からの考察—」『情報文化研究』. 17, 155-167
- 澤田瑞也・長瀬荘一・村上芳巳・民法紀彦[他]. 1990. 「中学生の友人概念に関する一考察:レブテストによる検討」『神戸大学教育学部研究集録』. 84, 205-217.
- 澤田瑞也・八木成和・藤田忍[他]. 1990. 「パーソナル・コンストラクトの発達的变化に関する一考察: 中学1年生にかけての追跡的検討」『神戸大学教育学部研究集録』. 85, 197-210.
- 杉本希映・庄司一子. 2006. 「居場所」の心理的機能の構造とその発達的变化『教育心理学研究』. 54. 289-299.
- 杉本希映・庄司一子. 2007. 「子どもの「居場所」研究の動向と課題」『カウンセリング研究』. 40(1), 81-91.
- 住田正樹. 2003. 「子どもたちの「居場所」と対人的世界」子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在『九州大学出版会』. 3-17.
- 鈴木明美. 2003. 「非行グループへのスクールカウンセラーの介入—学校での「居場所」作りを中心に—」『カウンセリング研究』. 36(4), 464-47.
- 高塚雄介. 2001. 「心理学から見た「居場所」『子ども・若者の「居場所の構想」「教育」から「関わり」の場へ』田中治彦編. 学陽書房. 36-50.
- 富永幹人・北山修. 2003. 「青年期と「居場所」.」住田正樹・南博文編『子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在』. 九州大学出版会. 381-400
- 若林明雄. 1992. 「George. A.Kelly.の個人的構成概念の心理学—パーソナル・コンストラクトの理論と評価—」『心理学評論』. 35(3), 311-338.
- 米田麻由子・金丸隆太. 2007. 「青年期における自立に関する一考察—G.A.Kelly のレパトリー・テストを用いて—」『茨城大学教育実践研究』. 26, 183-197.